

ハイパーフィールドワーク「野良仕事」

都留文科大学助教授 寺田良一

私の専門である社会学の守備圏は、地域、家族、組織などの理論から社会調査などフィールドワークによる実証的研究までと広いのですが、その中で私は、特に環境問題と社会の関係や環境保全的な地域づくりなどを現在の研究テーマにしています。生産本位から生活の質重視へ、科学万能・開発中心から自然との共生・環境保全へという価値観の変化は、地球環境問題が深刻化した今日では研究者にも広く認識されるようになりましたが、まだ大学院生だった私がこのテーマに取り組み始めた十年ほど前には先達もおらず、他の分野の専門家、環境保護や有機農業の実践家などを訪ね歩くのが第一歩でした。かつて著名な社会学者がフィールドワーク（実地調査）のことを「野良仕事」と「直訳」されましたが、古老のお話から多くの「収穫」を得た体験などからすると、これはまさに適訳です。

ゼミの学生にも「野良仕事」の快感(?)を味わってもらうために、夏休みには調査合宿を行っています。ここ二年は、合掌集落で知られる越中五箇山、富山県平村にお邪魔しました。私と学生は一週間公民館に寝泊まりし、村の方々に各自のテーマで聞き取り調査を



し、また自然の中で都会の子供たちを遊ばせるむらおこしイベントを手伝い、村の人々と一緒に汗を流します。

「尋常小学校」、「復員」、「反収何俵」など聞き慣れない言葉に四苦八苦しなから聞き取りをするうちに、学生たちが初めにいっていた暗い閉鎖的な山村というイメージが次第に変ってきました。

「このむらおこしは、都会の人にお金を落としてもらうより、まず村の人たち自身が自分の村の

味や自然を楽しんでいる。」
「村の人が元気で魅力的。特に都会からUターンしてきた人が村のよさを知っている。都会からこの村にくるお嫁さんも多い。」

「村には寝たきりや痴呆の老人はいないそうだ。今でもいい意味で自給的な暮らしが守られ、家の回りの畑や山でお年寄りの仕事がたくさんあるからだろうか。」

私たちの議論は続きます。これらの人々によってやっと維持されている農地や山林、そしてそのおかげで水資源を得、災害から守られている私たち。にもかかわらず減り続ける人口。ここで芽生えた問題意識を学生達は、卒業論文はもちろん、公務員や教員になった後も持ち続けてくれると思います。

さて昨年、このような私のゼミの一学生の提案がきっかけで、ゼミで畑を借りて耕そうということになりました。市を通じて休耕田を貸していただき、「社会学科学習農園」ができ、私たちのフィールドワークに、文字どおりの「野良仕事」が加わりました。おりしも、食糧生産だけでなく環境保全、都会人の人間性回復、地域活性化のためにも遊休農地を活用しようという、西欧型の「市民菜園」

づくりが行政と市民の両サイドから全国的に盛り上がり、東大や一橋大でも「学生農園」ができたそうです。各学生が六坪ずつ自主管理していますが、伏兵は夏休みの帰省で、草の管理を怠る者がままあり（これも一つの「学習」過程

だと思いますが）、申し訳なく思っておりません。将来は各学生の出身地から地元の種類を持ちよって、ミニ全国畑を作ろう、自炊の材料を自給しよう（だけ？）は大きくふくらんでいます。

ふるさと創生事業

ふるさと創生事業

ふるさと書写展

ふるさと創生事業「サンチ・キャンパスタウン都留」の「美との出あい」の郷「事業の一環として、都留市内の小・中学生を対象に作品を募集しますので出品してください。」

(課題)

- 小一 「つるしには、山が…」
- 小二 「夕やけ空が…」
- 小三 「ゆめ」「ふじ」
- 小四 「ふるさと」「谷川」
- 小五 「祭り」「平和」

- 小六 「流星」「広がる里」
- 中一 「進歩」「山鳥の声」
- 中二・三 「青雲の志」

小一・二は硬筆、小三以上は毛筆で、いずれか一点

(出品方法)

市内の小・中学校に指導を依頼し、校内より選抜して出品する。

(展示会)

12月12日(水)～14日(金)
文化会館四階大ホール

(表彰)

市長賞・ふるさと書写展大賞・準大賞・秀作・ふるさと書写参加賞

(主管)

都留文科大学書道研究室
代表 助教授 宮澤正明